114
A2768

佛國歸化法

城數馬

歸化ナル語ヲ最廣ノ義ニ解スル件ハ從來國民タラサル者ヲシテ國民タラシムル一切ノ方法ヲ總括スルモノニシテ佛國ノ制度ヲ按スルニ之ヲ分テ三トス第一外國ノ土地ヲ佛國ノ版圖ニ合シタルヨリ生スルモノ又ハ或ル地方ヲ限リテ行フモノ第二民法ノ規定セル特種ノモノ第三歸化法ニ基クモノ是ナリ」然ルニ第一ハ條件、法式、効果等總テ國際條約又ハ特別法ヲ以テ規定スルヲ故ニ一般恒久

ノ法規存セス且道理上存スヘキモノニ非ス故ニ之ヲ述フルノ必要アラサルヘシ唯之ヲ例セハ一千八百六十年三月二十六日仏蘭西「サルデーニヤ」間ノ條約、同年六月十二日サヴヲア「並ニ「ニース」郡ヲ以テ佛蘭西帝国ノ版図トセル元老院令、一千八百六十五年七月十四日「アルゼリー」ニ於ケル身分並ニ帰化ノ法律等是ナリ

又第二種ニ属スルモノハ民法第九條以下並ニ一千八百五十一年二月七日、一千八百八十二年二月十四日ノ法律ニ規定スルノニシテ之ヲ例スルニ佛国内ニ於テ出生セル外人ノ子、佛国男子ト婚シタル外国女子其他カ佛国民タル資格ヲ得ルノ方法ナリ然リト雖モ是等ハ帰化ニ依テ始テ佛国民タルヲ許スニ非ス始ト他ノ事故アリシ為メ當然ニ佛国民トナリ若クハ未必ノ條件附帯セル民籍ヲ得ルモノニシテ純然タル帰化ト同シカラス故ニ其詳ヲ記スノ必要ナシト信ス

前記第三種ニ属スルモノハ純然タル帰化ニ

シテ現行制度ハ一千八百四十九年十二月三日及ヒ一千八百六十七年六月二十九日ノ法律ヨリ成ル先ツ其沿革ヲ略述セン

沿革

大革命以前ノ制度ハ其詳ヲ知ル能ハスト雖モ唯国王ノミ獨リ帰化ヲ許可スルノ全権ヲ有シタルハ明ナリ然ルニ一千七百九十年ニ至リ新主義ノ法律(四月三十日ノ法律)出テ一定ノ年限間引續キ佛國ニ住スル時ハ當然歸化生スルモノトシ一千七百九十一年九月十四日並ニ一千七百九十三年六月二十四日ノ両憲法ハ共ニ此主義ヲ取リ法律ニ明記シタル或事実アル年ハ其外人ヲ以テ全ク佛國ニ住スルノ意思アルモノト推定シ隨テ若シ外人ニシテ佛国人タルヲ欲セスンハ直チニ佛国ノ去ラサル可カラス然ラサレハ已レ之ヲ欲セスンヲ求メリルモ當然歸化ノ生スルモノトヒリ斯ノ如キ制度ハ獨リ外人ノ為メニ不利ナルノミナラス国家ノ為メニモ尚ホ其宜ヲ得タリト称スヘキニ非ス

革命第三年フリュクチユドル月五日ノ憲法ハ此主義ヲ捨テ外人ニシテ佛国ニ住スル者帰化セントスル件ハ帰化ノ意思及ヒ永久住居ノ意思ヲ明示シテ帰化ヲ得ル事トシ革命第八年フリメール月二十二日ノ憲法モ亦同一ノ規定ヲ設ケタリ然レトモ尚ホ政府ノ特許ヲ要セストセリ特許ノ制ヲ設ケタルハ実ニ一千八百九年三月十七日ノ布告ニシテ此時ヨリ前記ノ條件備具スルモ唯帰化ヲ求ムルノ資格アルノミニシテ之ヲ許否スルハ政府ノ権内ニアリ

一千八百十四年六月四日ノ布告出テ、コリ従前記ノ法律ニ基キ帰化ヲ得タル者ハ未タ立法議院ニ列スルノ権ヲ有スル能ハストシ唯国家ニ重大ナル功勞アル外人ハ両院ノ検閲ヲ経国王ヨリ与ヘタル帰化状ニ基キテ佛国民ノ有スル一切ノ権利ヲ得ルヿトナレリ之ヲ大帰化ト称セリ

一千八百四十九年十二月三日ニ至リ完備セル帰化法出テ其精神ハ一千八百九年ノ布告

ニ同シク立法議員被撰権ニ関シテハ千八百
十四年ノ布告ト主義ノ同ウシ特ニ法律ヲ以
テ之ヲ得セシムヘキモノナリ
人ニ関スル帰化ノ範囲ニ至テハ之ノ得タル
者ノ一身ニ止リ更ニ其既生ノ子ニ及ハサル
モノトス唯千八百五十一年二月七日ノ法律
出テヽヨリ既生ノ子ト雖モ純然タル帰化ノ
法律ニ従ハス民法第九條ノ規定後ノコトヲ
許セリ故ニ帰化シタル者ノ其以前ニ挙ケタ
ル子ハ其住居地ノ町村廨ニ佛国人タラント

欲スル旨ヲ届出ル時ハ別ニ特許ヲ要セス当
然帰化生スルヿトナレリ

現行法

現行法ハ一千八百四十九年十二月三日ノ法
律及ヒ之ニ改正ヲ加ヘタル一千八百六十七
年六月二十九日ノ法律ナリ両者ヲ對比シテ
之ヲ記サン

一　帰化ヲ請フヲ得ル者

帰化ヲ願フニハ左ノ條件ヲ備ヘサル可カラス

第一　満二十一年ノ齢ニ達シタル後

民法第十三條ニ從ヒ佛國ニ住居ヲ定ム
ルノ許可ヲ得タル一
第二　住居ヲ定ムルノ許可後三ヶ年
間佛國ニ住シタル一（旧法ハ之ヲ十ヶ年
トセリ）
新旧相異ナル所ハ唯住居年限一ハ十ヶ年ニ
シテ一ハ三ヶ年トセルニ在ルノミ此要件備ハ
ル者始メテ帰化ヲ願フヲ得ヘシ外人ヲシ
テ帰化セシムル或場合ニ於テ國家ニ裨益
サナカラス且ツ徒ニ帰化ヲ禁スルカ如キハ

固ヨリ理ニ合シタリト称スヘカラス然レトモ單
ニ去ル者ハ追ハス来ル者ハ拒マストノ理論
ヲノミ墨守シテ更ニ帰化ノ條件ヲ定メス又
別ニ請願特許ヲ要セストスルハ佛國古法ノ
如キハ決シテ策ノ得タルモノニ非ス帰化ニ依テ
国民タラント欲スル者ハ從來ノ本国ヲ捨テ、
來ル者ナリ然レトモ故国ヲ捨テ、身ヲ他
国ニ投スルハ人ノ軽シク為ス所ニ非ス若シ
妄ニ之ヲ為ス者アランカ其間或ハ秩序ヲ
紊リ国家ヲ害スルノ徒無キヲ得セス是レ

蓋シ祀人ノ憂ナルヘク絶無稀有ナリトスル
モ帰化ノ妄ノ許スヘカラサルハ疑ナキ所タ
リ故ニ先ツ單ニ国内ニ住居スルノ許可ヲ与
ヘ数年ノ間外人カ其国ヲ利シ其国ニ身ヲ定
ムルノ意思確乎タルヤ否ヤヲ験シテ後チ
始メテ帰化ヲ願フヲ得セシムルハ蓋シ其
宜シキヲ得タルモノナルヘシ唯住居年限ニ
至リテハ国ニ依テ同一ナラサルヘシト雖ト弗
国ノ新法ニ三ヶ年トセルハ短キニ過ルカ如
シ

右ノ期限ハ一般ノ通則ニシテ普通ノ外人ニ
適用スルモノナリ若シ国家ニ対シ特別ノ功
労アル者ニ至テハ之ヲ優待シ帰化ヲ容易ナ
ラシムルヿ至当ナルヘシ故ニ旧新両法共ニ
此年限ヲ短縮シテ一ヶ年トスルノ許セリ第
二條所ミテ法律ノ特典ヲ与ヘタルハ仏国
ノ為ニ重大ノ功績ヲ為シ或ハ仏国内ニ工業
又ハ有益ナル発明ヲ入レ或ハ顕著ナル学藝
技術ヲ奨ラシ若クハ宏大ナル造営物ヲ起シ
又ハ大農業ヲ興メタル外人ナリ

此例外ハ往時ニ在テモこれヲ許サタルヲ
リ即チ革命第十一年ヴァンテミエール月二
十六日並ニ一千八百〇八年二月十九日ノテ
老院令ヨリ然レトモ大ニ同シカラサルモノ
アリ現行法ハ此特例ヲ單ニ国家ノ功勞ヲ立
テタル者或ル利益ヲ起シタル者ニ止ムレトモ
古法ハ然ラス尚ホ將來ニ功勞ヲ立ツヘキ者
將來ニ利益ヲ起サントスル者ニモ之ヲ及ホセ
リ將來未必ノ功勞者ニ此特典ヲ与フルハ策
ノ得タルモノニ非サルヘシ

且ツ仏国政府ノ命シタル職務ヲ行フ為メ外
国ニ在ル者ハ之ヲ以テ仏国内ニ住スルモノ
ト同一視シ其時間ヲ算入(新第一條三項)
期限ノ如何ニ論ナク之カ計算ハ司法省ニ於
テ住居ヲ定ムルノ許可願ヲ登簿シタル時ヨ
リ起算ス(新第一條二項)

二 帰化願手続

外人ニシテ帰化セントスル件ハ印紙ヲ附シ
タル紙ニ願書ヲ認メ司法大臣ニ差出シ之ニ
添フルニ出生証書ヲ以テシ而シテ法律ノ定

メタル年限間仏国ニ住シタルヿヲ証明スル
ヲ要ス請願者此手續ヲ為シタル以上ハ唯之
カ許否アルノミ

三　帰化ノ特許並ニ其方式

帰化ノ特許ヲ與フルハ皇帝若クハ大統領ノ
專有スル權内閣ハ勅令大統領ハ布告シ以
テ之ニ属スル故ニ要件ヲ具フル外人ニシテ一
定ノ手續ヲ履ムモ尚お是ヲ拒否スルヲ得ヘ
シ

司法大臣日リ許否ニ関スル意見ヲ添ヘテ帰
化願ヲ進達スルハ請願人ノ德行上ニ関ス
ル調査ヲ為シ參事院ノ諮詢ヲ經サル可ラス
帰化ノ下調ハ參事院中立法部司法部及ヒ外
務部ニ於テ之ヲ為シ而シテ確定議ハ必ス參
事院ノ総会ニ於テスルノ規定（一千八百五十
二年一月三日布告第十三條）ナリシモ今日ニ

至テハ第二千八百六十七年六月廿九日ノ
法律第二條ニ從テ特許ヲ與フル帰化ノ場合
ノミ総会ニ附スルノ制ナリ（一千八百七十九
年八月二日布告第七條第十七）
参事院ニ於テ特許ヲ可トスルモ皇帝若シハ
大統領ハ其意見ノ為メニ束縛セラルヽナク
尚ホ特許ヲ拒ムヲ得ヘシ之ニ反シテ参事
院若シ特許ヲ不可トナリトスル場合ニ当テハ
新旧西法ノ規定相反シ四十九年ノ法律第一
条ハ皇帝若シハ大統領ヲシテ必ス其意見ニ
從ハシメ久リ即チ参事院ノ意見ニ從フニ服
サレハ特許ヲ與フルヲ得ス六十七年ノ法律
第一條ニ依レハ其場合ト雖モ皇帝又ハ大統

領ハ許否ノ為メ自由ニシテ参事院ノ意見ヲ
聞クヲ要スルモ敢テ之ニ從フヲ要セス
西法ノ斯ク相反スルハ故ナキニ非ス旧法ノ
制定セラレタル当時ノ憲法ハ参事院ヲ以テ
行政府ヨリ独立セル一個ノ官憲トセルカ故
ニ帰化ノ特許ニ関シテモ其権力ヲ大ニセル
モ新法頒布ノ当時ニ在テハ然ラス参事院ハ
行政裁判以外ノ事物ニ於テ行政府ノ活動作
用ヲ拘束スルノ権ヲ有セサレハ也
帰化ノ特許アラサル間ハ已ニ與ヘタル住居
ヲ定ムルノ許可ハ政府ニ於テ之ヲ廃罷シ又
ハ変更スルヿヲ得、然レル帰化ノ許否ヲ為ス
ト同一ノ方式ヲ履マサル可ラス（四十九年ノ

法律第三條）

四　帰化人ノ負擔

帰化ノ特許ヲ得又ハ十五ヶ年ヲ継ムルヲ要スル且ツ其前仏國内ニ住居ヲ定ムルノ許可ヲ受ケル時ニ当テモ等シク許可料百七十五フランヲ納ムルノ義務アリ而シテ其因テ来ル所ヲ尋ヌレハ遠ク一千八百十四年十月八日ノ勅令ニ一千八百十六年四月二十八日ノ法律ニアリ「リビエール」ノ編輯ノ法典ノ按スルニ一千八百五十年八月七日ノ法律第七條ニ依リ、右ニ記ス住居ヲ定ムルノ許可ヲ與フルハ帰化ノ特許ヲ與ヘタル場合ト同一ノ金額ヲ徴收スルモノトシ而シテ一千八百十四年十月五日ノ勅令ニ因リ帰化ノ場合ニ納ムヘキ金額ハ印璽料五百フランニ登簿料百フランヲ合計六百フラントセリ本文記スル所ハモーリス、ブロック行政字典ニ基キ尚ホ暫ク疑ヲ存ス）

此負擔ハ特ニ其全部又ハ一部ヲ免除スルヲ得ルモノトス

五　特許ノ効果

特許ノ効果ハ三個ノ点ニ於テ之ヲ説カサル可ラス

一　人ニ関スル効果　帰化ノ効果ハ特許ヲ得タル者ノ一身ニ止ルヲ以テ原則トス故ニ其親子、配偶者等ト雖モ其利ヲ受クルヲ得ス

然レトモ此原則ニハ少クトモ二個ノ例外アルカ如シ

(甲)外國ノ男子帰化スル時ハ其妻モ亦当然帰化ヲ受ク此点ニ於テハ固ヨリ明文存セス学者ノ説一致セストモ虽モ妻ハ夫ノ國籍ニ従フヲ以テ原則トスルヲ佛法ノ如クナル以上ハ婚姻ノ前後ニ依リ區別ヲ為スヘキ理由アルヲ見ス

(乙)帰化シタル者ノ其前ニ擧ケタル子ハ当然帰化ヲ受ケスト虽モ民法第九條ノ規定ニ従ヒ佛國民タラントト欲スル旨ヲ届出テ住居ヲ定ムルトキハ特ニ帰化ノ願ヲ要セスシテ佛國民タルヲ得ヘシ(一千八百五十一年二月七日ノ法律第二條)

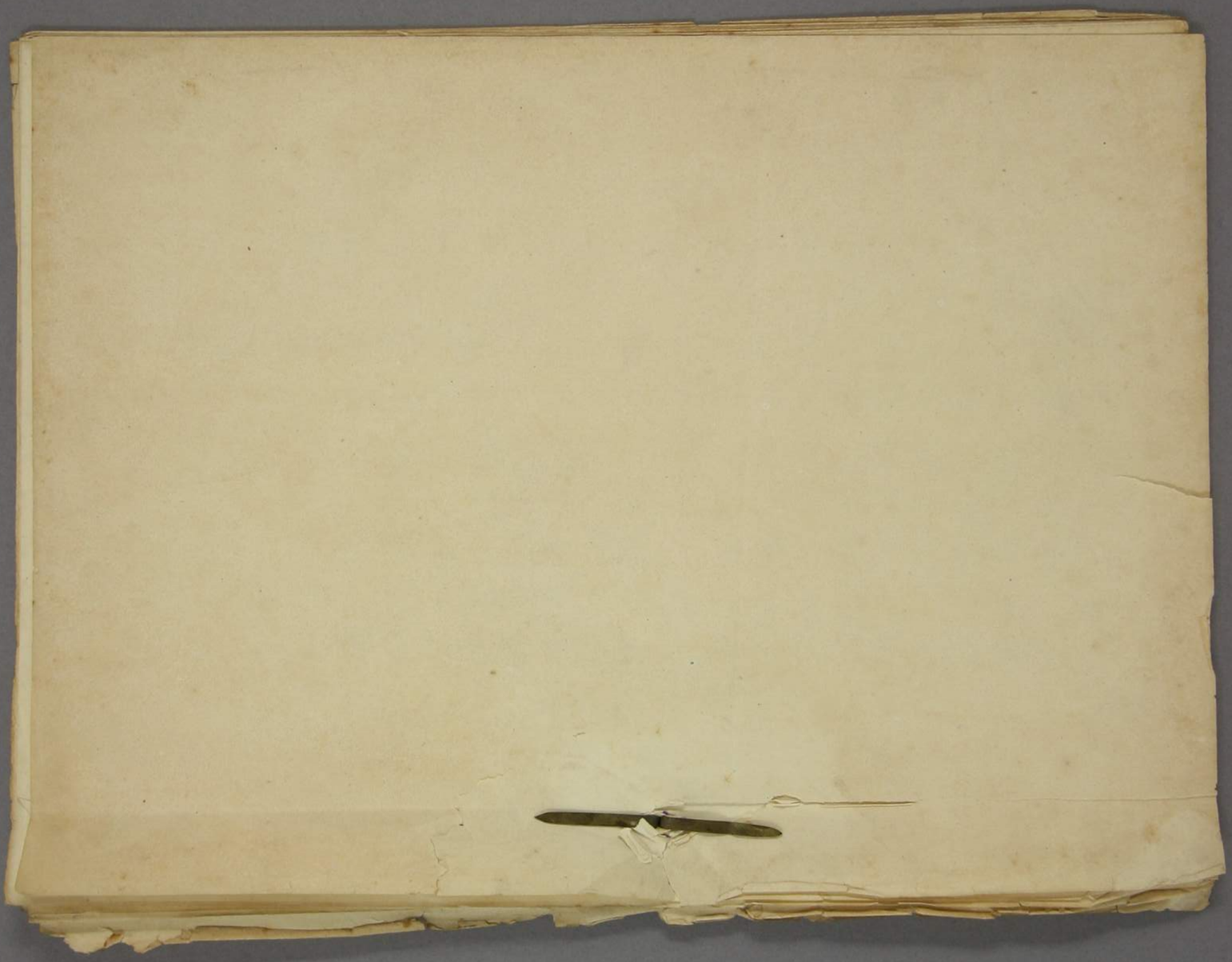
二 時ニ関スル効果 帰化ノ効果ハ特許ヲ得タル時ヨリ將来ニ生スルモノニシテ遡及ノ効ナシ明文ノ之ヲ規定スルナク且ツ或ル特別ノ場合ニ関シ解釈者ノ間多少ノ異論ヲ免レスト虽モ若シ帰化者出生ノ当時ニ遡及スルモノトセハ或ハ為メニ既得ノ権利ニ変動ヲ来タシ為メニ小ニシテハ一家大ニシテハ一國ノ混乱ヲ来スノ憂ナキ能ハサルヘシ

三 権利ニ関スル効果 外人ニシテ一旦帰化ヲ得タル時ハ佛國民ノ享有シ得ヘキ公私一切ノ権利ヲ享有ス

四十九年ノ法律(第一條末項)八千八百十四

年ノ布告ト精神ヲ一ニシ帰化人ハ立法議院ノ特許ヲ得ルニ非サレハ議員被撰権ヲ有セストセルモ六十七年ノ新法ハ之ヲ廃シ全ク佛國公民タルノ権ヲ與ヘタリ帰化シタル以上ハ均ク國民タリト雖モ之ヲシテ直ニ議員タルヲ得セシムルハ或ハ軽率ニ失スルモノニハ非サルカ立法議會若クハ政府カ特ニ許可スルヲ待テ後始メテ此重要ノ権利ヲ享有セシムルモ決シテ遅シト云フ可ラス被選権ハ其関スル所一個人ノ私益ニ止ラス國家休戚ノ繫ル所豈之ヲ忽ニスヘケンヤ

佛國帰化ノ制度ハ右ニ記ス所ヲ以テ其詳ヲ悉セリト信ス然レトモ特別ナル者并ニ民法中ニ記セル變態ノ帰化ニ至テハ全ク此以外ニ存ス若シ之ヲ述フルノ必要アラハ更ニ閣下ノ命ヲ待テ記サン

明治廿二年八月一日

城数馬